論　文

看護学士課程における英語教育一試論
― ESP の視点から―

渡部　富栄（大東文化大学スポーツ・健康科学部）

A Study on ESP-Based English Education in Baccalaureate Nursing Program

Tomie WATANABE

Abstract: English for Specific Purposes (ESP) in nursing programs has mainly been designed for occupational purposes in Japan. Nursing is, however, a research-oriented profession with many professional and academic societies and congresses domestically and globally. In nursing, practitioners as well as researchers/ educators present and publish their papers. The past thirty years in Japan have witnessed 25-time increase in four-year baccalaureate nursing program from eleven in 1989 to 267 in 2017. It is necessary to enhance ESP for not only occupational but also academic purposes at rapidly increasing four-year university-nursing programs in the country. Students in those programs will know well about English language specific to global nursing discourse community which they will enter in future. To this end, the author developed an ESP-based teaching program for baccalaureate nursing students in the Department of Nursing, the Faculty of Sport & Health Science, Daito Bunka University (hereafter, DBU Nursing). The department started its operation in April, 2018.

This article aims at reviewing past ESP researches relevant to nursing, clarifying the genre of global nursing discourse community, explaining the outline of the English Communication Program of DBU Nursing, and presenting the survey results of the DBU freshman nursing-students who completed the first semester in 2018. The author hopes that this article will facilitate better progress of ESP-based English education in the country's baccalaureate nursing program.

1. はじめに

大学の英語教育において、特定目的のための英語（以下、ESP：English for Specific Purposes）が注目されたのは、専門分野の目的に叶う英語教育へのニーズからであった。看護系の大学数はこの 30 年間で 25 倍（1989 年の 11 校から 2017 年度 267 校）に増加し、定員は 22,000 人を超える（日本看護系大学協議会 2018）。大学の専門分野の中でも看護は、看護専門職の養成という特定の職業目的をもつ。そのため、ESP において職業目的の英語教育（以下、EOP：English for Occupational Purposes）が強化されてきた。その重要な成果として、医療英語や診療場面のダイアローグを中心にしたテキストはいくつか開発されてきている。しかし、看護の ESP にはもう一つ、学術目的の英語（以下、EAP：English for Academic Purposes）に焦点を当てた指導が必要であるのだが、まだほとんど手がつけられてはいない。

看護は「実践の科学」といわれる研究志向の専門職であり、学会の数も多く、研究者だけでなく、現場の多くの看護職が学会で発表する。ただ、他の分野と共通した日本の課題ではあるが、英語での論文発表や口頭演題の数は少ない。日本の看護師の英語の課題を解決するには、急増する看護学士課程の英語教育を、EOP および EAP の両方をカバーする ESP プログラムにする必要がある。その一つの試みとして作成したのが、2018 年 4 月に開設された大東文化大学スポーツ・健康科学部看護学科（以下、大東看護）の英語コミュニケーション・プログラムである。本稿では、このプログラムの進捗を確実にするために、関連する知識や情報をまとめ報告する。前半では看護学士教育における ESP の先行研究をレビューしたのちグローバル看護のディスコース・コミュニティの英語の特徴（ジャンル）を検討する。後半では、大東看護の英語プログラムの概要と 1 年次前期プログラムを終了した学生への調査結果について考察する。

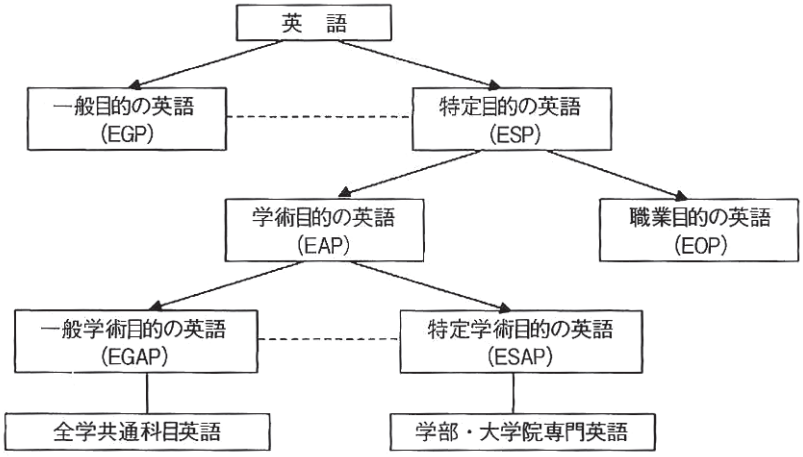
2. 大学英語教育の枠組みと ESP

ESP（English for Specific Purposes、特定目的のための英語）に関する研究および実践の起源は、16 世紀に英国でビジネス英語の必要性が注目されたことに遡る。本格的な動きが始まったのは、経済および科学テクノロジーの発展により、 世界で英語の使用が活発になった 1960 年代である（Dudley-Evans, T. & John, M.J. 1998：1）。ESP 研究はレジスター分析からスタートし、1980 年代のニーズ分析、そしてそのニーズ分析を発展させて、国際社会の英語のニーズを特定してそれに見合った ESP 教育を行うというジャンル分析の時代（寺内他 2010：6）になって現在に至る。

ジャンルとは、ディスコース・コミュニティ（当該の専門家集団）が内外に対して行っている、様式化されたコミュニケーション・イベント（講演や学術論文、メモ、文書や手紙の交換など）のことである。ディスコース・コミュニティの一員として学問あるいは職業上でグローバル・コミュニケーションに参画するには、当該分野のジャンルを使いこなせなければならない。ESP を使えば、ジャンルの言語的特徴を教えることができる。学生が言語的特徴を理解して活用できるように

なれば、将来、実際に看護のディスコース・コミュニティに入ったとき、新しいジャンル（コミュニケーション・イベント）に遭遇しても、対応する術が分かる。これは寺内ら（*ibid.*：15）がいう learner's autonomy（学習者の自律性）で、自分の言語使用を判断して自己決定していくことができるようになることである。専門家ディスコース・コミュニティのジャンルの変化に対して自律的に対応できる力を身につけさせるのが大学での英語教育だといえる（*ibid.*：223）。

日本では、1990 年代以降、各大学で英語カリキュラムの改革が進められる中、ESP アプローチは採用されてきた。田野地によると、大学の英語教育の枠組みは、図 1 になる（田地野・水光、2005：11）。



＊点線は連続体を示す。

図 1　大学英語教育の目的[1]（分類）（田地野・水光、2005：11）

図 1 を看護学士課程の英語教育に当てはめると、看護という特定目的の英語（ESP）いうことになる。ESP は学術目的の英語（EAP）と職業目的の英語（EOP）を含む。4 年制大学の看護学生にはこの両者が必要になる。看護師に必要な英語というと、看護ケアや診療の場面における英語話者の患者や家族への対応のための英語と考えがちだが、それは EOP のことである。看護における英語教育者はこれまで、EOP のために使える教科書の作成に努力してきた。結果として、有用な看護学生用テキストがいくつか市販されるにはいたっている[2]。診療科別にケア場面をとり上げ、関連疾患の症状、診断、ケアや治療の単語をダイアローグ形式で学ぶように設定されており、大学の半期

[1] EGP: English for General Purposes, ESP: English for Specific Purposes, EAP: English for Academic Purposes, EOP: English for Occupational Purposes, EGAP: English for General Academic Purposes, ESAP: English for Specific Academic Purposes.

[2] たとえば、次のものがある：
助川尚子（1999）『やさしい看護英語』成美堂
笹島茂、山崎朝子（2017）『医療と看護の総合英語（三訂版）』三修社
井上麻未、松岡里枝子、芦田ルリ、宮津多美子、Jeffrey Huffman（2016）『すぐに使える医療・看護英語』メジカルビュー社

授業回数で終了できるように構成されている。同様の目的で、大学が一般看護師向けの英語セミナーを開催したりもしている。これらをみると、看護師のための英語＝ EOP ととらえられている印象である。ほとんどの卒業生が臨床現場で看護師として働くことが期待されている看護系大学で、このことは当然の成り行きだともいえる。ただ、ここで整理しておく必要がある。看護学士課程の英語教育は EOP だけではでは不十分で、看護研究を実施し発表するための EAP が必要である。

3. 看護系大学の ESP 教育に関する先行研究

日本において、大学の看護教育課程における ESP に関する先行研究はいくつかあるが、いずれも学生や教育機関へのニーズ分析によるもので、EOP と EAP に分けての言及はない。本岡・川崎は、大学入学時と卒業直前の学生への意識調査の変化を指摘し、入学当初の学生のニーズは、聞く（ママ）・話すというコミュニカティブ能力の習得なのだが、卒業直前では卒業研究や実習の経験から、80％以上の学生が読む能力の習得の必要性を指摘した（1999：30）。廣内（2012：107）は、ESP により看護学生が英語を学ぶ動機づけを高めることができると述べている。口元志・竹内（2009：53）は、看護が専門学校から大学教育に移行したことで、英語必須科目の単位数が 2 倍になったこと、また指導の中心は専門学校が一般英会話で、大学が講読などを中心にしていることを明らかにした。

これらの研究はすべてニーズ分析に基づくもので、看護系大学での ESP 研究でジャンルを分析したものは皆無である。

4. 看護のディスコース・コミュニティにおけるジャンル

この章では、まだ検討が十分されていないグローバル看護のディスコース・コミュニティにおけるコミュニケーションの特徴を論じる。

4.1 学部の看護理論の授業でとり上げられる理論家とキーワード

学士課程では主な看護理論を考察し、学生が看護とは何かを理解して、自分の看護観を確立できるように導いていく。大東看護の看護理論の担当教授である豊嶋三枝子によると、学部でとり上げる理論家は次項のようになる。看護学士課程において共通して教えられる理論家である。理論家の氏名の後に、『看護理論家とその業績』（トメイ他、2004）に基づき、それぞれの功績を示すキーワードとキーポイントを記す。これらは、看護を論じるときの世界共通の前提概念だといえる。

4.1.1 学部教育で学ぶ看護の理論家

・Florence Nightingale（フローレンス・ナイチンゲール 1820-1910）：近代看護の創始者とされている。代表的著書 *Note on Nursing*（『看護覚え書』（かんごおぼえがき）1860 年発表）で、看護であることとないことを区別し、看護師が整えるべき環境（environment）の構成要素である換

気、保温、陽光、食事、清潔さ、物音について詳細に明らかにした。学生が入学するとまず、看護とは何かを教えられる。我が国のナイチンゲール研究者の金井一薫（2009：28）によると「（『看護覚え書』は）日本の 看護師教育の中では定番となっており、看護学生はその生涯の学習過程の初期の段階で、『看護覚え書』と向き合うように育てられている」。

・Virginia Henderson（バージニア・ヘンダーソン 1887-1996）：看護ケアの構成要素のもとになる患者の 14 の基本的ニーズ（needs）を身体、心理、社会的なものとして層別化した。日本の看護では、ニーズは長い間「ニード」といわれている。病気などで健康や健康回復を促せる行動を自分でとれない場合に、それを援助し自立を促すのが看護師であるとした。

・Dorothea Orem（ドロセア・オレム 1941-2007）：Self-care Deficit Theory（セルフケア不足理論）が代表的理論である。セルフケアは人間のニーズであり、何らかの理由でそれができなくなると、人間は看護師のケアを求めるとした。

・Margaret Jean Harman Watson（マーガレット・ジーン・ハーマン・ワトソン 1940-）：看護の主要な概念としてヒューマン・ケアリングを提唱した。

・Sister Callista Roy（シスター・カリスタ・ロイ 1939-）：Adaptation Theory（適応理論）が有名で、看護とは人間の適応システムを促進していくことだとした。

・Hildegard Peplau（ヒルデガード・ペプロウ 1909-1999）：患者を看護行為の対象ではなく、看護の過程の共同作業者として位置づけ Interpersonal Relations in Nursing（対人関係理論）を打ち出した。

・Madeleine Leininger（マデリン・レイニンガー 1925-2012）：文化の違いを考慮しながら看護計画や健康教育を検討するという民族看護学を提示した。主要概念は、ケア（Care）、ケアリング（Caring）、文化（Culture）、文化的価値観（Cultural values）、文化の多様性（Diversity）、普遍性（Universality）などである。

4.1.2　学部で学ぶ看護理論家から導き出される看護理論のキーワード

前掲書（2004）に基づき、看護理論家から導き出される語彙を抽出すると以下になる。nurse 看護師、nursing 看護、care ケア、caring ケアリング、human-being 人間、environment 環境、health 健康、needs　ニーズ（ニード）、adaptation　適応（アダプテーション）、system　システム、communication　コミュニケーション、self-care　セルフケア、culture　文化、empathy　共感、compassion 慈しみの心（思いやり）、comfort 安楽、theory 理論、nursing plan 看護計画、nursing process 看護過程、nursing diagnosis 看護診断、nursing practice 看護実践、nursing administration 看護管理、care management ケアマネジメント

これらはすべて、看護ケア（の実践）の要素になる言葉である。看護師として知っておくべき必須概念ではあるが、現在のグローバル看護の議論に入っていくにはこれだけでは不十分である。では、現在のグローバル看護で使われる語彙はどうなっているのかを次節で考察する。

4.2　現在のグローバル看護でとり上げられているキーワード

筆者は、看護師としておよそ 8 年の臨床経験を持つ。その後、会議通訳者になり 15 年にわたり国際看護師協会（ICN, International Council of Nurses） や国際助産師連盟（ICM, International Confederation of Midwives）の関連会議において同時通訳を行い、関係資料の翻訳も行ってきた。また、ICN 機関誌 *INR*（*International Nursing Review*）誌の日本語版『インターナショナル・ナーシング・レビュー』誌（日本看護協会出版会発行）で 2000 年から 2012 年の休刊時まで記事や論文の翻訳をしてきた。これらの経験とともに *INR* 誌に頻出する概念と語彙に注目し、キーワードを以下のように分類した。これらは、今のグローバル看護のディスコース・コミュニティの言語的特徴であり、看護系大学の英語教育においては、こうした特徴を含んだ教材の選定を考慮すべきと考える。

4.2.1　看護に影響を与える社会および保健医療全体の動きに関するキーワード

health 健康／保健／医療、healthcare 保健医療／ヘルスケア、health（care）policy（保健）医療政策、politics 政治、economy 経済、society 社会、patient safety 医療安全、aging society 高齢社会、community コミュニティ／地域社会、home-based care 在宅ケア、community-based integrated care system 地域包括ケア

4.2.2　看護に関係するグローバル・ヘルスに動向に関するキーワード

WHO（World Health Organization：世界保健機関）、SDGs（Sustainable Development Goals：持続可能な開発目標）、UHC（Universal Health Coverage：ユニバーサル・ヘルス・カバレッジ）

4.2.3　看護専門職に関連したキーワード

profession 専門職、professional 専門職者、nursing profession 看護職、nursing professionals 看護職者、professional issues 専門職問題、education 教育、leadership リーダーシップ、assertive communication アサーティブ・コミュニケーション、critical thinking クリティカル・シンキング、logical thinking 論理的思考、direct care 直接ケア、patient satisfaction 患者満足度、team care チームケア、multi-disciplinary team 集学チーム、inter-disciplinary collaboration 多職種連携、nurses' profile in society 看護師の社会的地位、policy-making 政策立案、policy recommendation 政策提言、nursing research 看護研究、care quality ケアの質、primary health care（PHC）プライマリ・ヘルス・ケア、NCDs（non-communicative diseases）非感染性慢性疾患（生活習慣病のこと）、empower エンパワー、human rights 人権、health guidance 保健指導、poverty 貧困、women's issues 女性問題

4.2.4　看護の制度や法律に関連したキーワード

regulation 規制、scope of practice 実践の範囲、expanding scope of practice 実践の範囲の拡大、

full scope of practice 認められている実践の範囲すべて、autonomy 裁量／自己決定権／自律、prescription right 処方権限、independent practice 独立した実践、nurse entrepreneur 看護師の起業家、APN（Advanced Practice Nurses：高度実践看護師）、NP（Nurse Practitioner：ナース・プラクティショナー）、PA（Physician Assistant：フィジシャン・アシスタント）

4.2.5　看護労働に関連したキーワード

workforce 人材、workforce issues 労働問題、positive practice environment（PPE）働きやすい労働環境、safe staffing 安全な職員配置、skill-mix スキル・ミックス、task-shifting タスク・シフティング、work-life-balance ワーク・ライフ・バランス、recruitment 雇用、retention 定着、turnover ／ attrition 離職、workplace violence 職場の暴力、

4.2.6　グローバル看護の語彙にみられる傾向

以上の語彙から、現在のグローバル看護は社会や保健医療を抱合した大きな範囲をカバーしていることが分かる。看護は社会から影響を受ける。政治・経済といった社会情勢を分析・予見・戦略の立案をしていかないと、病院の被雇用者がほとんどである看護師は社会変動に翻弄される。こうした状況はベトナム戦争以降の米国で顕著になり、グローバル看護の研究は一気に社会学研究に転回し、現在に至った。

看護学生に対する英語教育の時間は、医学技術の用語などを学ばせるだけでは不適切である。また、看護理論を原書で読ませるような授業でもない。理論の原書講読は、看護の専門教員が看護学の授業時間の中でやるべきものだと考える。看護学士課程の英語教育では、上記のグローバル看護のディスコース・コミュニティが使うキーワードが含まれ、しかも看護がさらに発展していく可能性を示唆できる資料を用いるべきだろう。そうすることで、学生らが将来、そのコミュニティに入ったときに、各自のコミュニケーション戦略を立てて実践できる道筋をつけることができる。これは看護における EAP になる。

5.　看護学士課程の英語教育で使用できる教材

寺内（*op. cit.*：219）が指摘するように、大学入学時の学生は語彙も限られている。だから sub-technical terms を含めた教材を使って、看護の ESP への橋渡しをする必要がある。たとえば 4.1 の empathy（共感）や compassion（慈しみの心（思いやり）、4.2 の human-rights（人権）や women's issues（女性問題）といった普遍的な概念が含まれるもの、プライマリケアで扱う diabetes（糖尿病）や obesity（肥満）といった病名などが出てくる一般向けの健康ニュースなどは、橋渡し教材としては適切であろう。教材例には以下のようなものがある。

・マララ・ユスフザイ　国連スピーチ：“Education first” と締めくくった有名なスピーチである。

画像音声、スクリプトはインターネットから入手可能である。英語に少し訛りがあるがゆっくり

した速度である。看護は長い間、女性の仕事として社会的にも抑圧された地位にあったという歴史を持つ。女子教育については開発途上国の状況も含め、知識としても知っておく必要がある。

・ヘルス・ニュース：VOA などのニュース教材からゆっくりしたスピードのものを選ぶ。音声とスクリプトはインターネットから入手可能である。生活習慣病や生活の質（QOL）など、一般的な知識で、かつ看護専門領域にも深い関係を持つ内容がよい。

・Jack Canfield（2001）. *Chicken Soup for the Soul.* Health Communications, Inc.（邦訳『こころのチキンスープ』ダイヤモンド社） チキンスープとは、病気で食事が食べられないときに飲む滋養に富む暖かいスープを指す。『こころのチキンスープ』シリーズは、心が落ち込んだ時に読むと元気になるショートストーリーを集めたもので、全米でベストセラーになっている。人間の愛、思いやりなど普遍的に受け入れられるテーマである。シリーズの中に、

――――――（2011）. *Chicken soup for the Nurses' Soul.* Backlist, LLC.（邦訳『愛はあなたの手の中に ナースが贈るこころのチキンスープ』看護の科学社）がある。看護学生の臨地実習で患者に清拭をしていた時の出来事など、学生にとって身近なストーリーが数多く含まれており、基本的な看護技術の英語表現がストーリーを通して学べるものである。

以上のような sub-technical 教材で導入の授業の後、EOP と EAP に入ることになる。EOP については、使える市販教材がいくつか入手でき、それを使って授業をすることで、診療場面の看護の英語コミュニケーションはある程度学ぶことができる。そのために EOP に関する教材については本稿ではとり上げない。

EAP としてはまず、EGAP（一般学術目的の英語）としてアカデミック・ライティングやプレゼンテーションの指導をする。他学部で使われているような一般的な大学生用の教材でよいだろう。そのあと、本格的な看護の ESAP（特定学術目的の英語）となるのだが、教材としては、以下にあるように、社会学的な視点で書かれた看護の論文や報告書などが好ましいと思われる。

・IOM（2010）. *The Future of Nursing: Leading Change and Advancing Health.* https://www.ncbi.nlm.nih.gov/books/NBK209880/pdf/Bookshelf_NBK209880.pdf

：米国の看護および看護師の現状を分析し、未来への提言を、米国科学アカデミーの医学研究所（IOM）レポートとして出したものである。米国国内の状況ではあるが、グローバル看護が直面している問題がまとめられている。読み進めるうち、グローバルな看護コミュニティが重視する概念が分かり、特徴的な語彙およびコロケーションを学ぶことができる。読んだ後は、英語でのグループディスカッション、まとめを英語で書いてプレゼンテーションができる。

・持続可能な開発目標（SDGs）に関するレポート：国連は 15 年毎に開発目標を新しくしている。2001 年に始まったミレニアム開発目標（MDGs）は 2015 年に終了し、2016 年から 17 項目の持続可能な開発目標（SDGs）になった。健康（SDG 3）やジェンダー（SDG 5）、不平等の是正（SDG 10）など看護に深い関係を持つ内容で、目標達成に看護師の力が期待されている。SDGs は 2030 年まで継続される。SDGs に関する概念や語彙表現は各国の国家政策に影響を与える。

・Nursing Now ! Campaign：英国で今年スタートした看護と看護師をエンパワーするための 3 年間

のキャンペーンで、2020 年ナイチンゲール生誕 200 年の年まで続く。看護師をエンパワーすることが、女性の雇用を安定させて健康的な社会を作り経済を強化するとしている。国際看護師協会や WHO と連携して展開されており、グローバル・ナーシング・コミュニティが参加し、各国の看護政策に影響を与えている。英国のキャサリン妃が支援しており、スピーチの動画とスクリプトも入手できる。

以上の教材の使用を含め、今年開設された大東看護における英語教育プログラムを立案し、実行を進めているところである。その大東看護の英語教育プログラムについて、次章で詳述する。

6. 大東看護の英語教育プログラム

6.1 概要

必須科目として、1 年次は、英語コミュニケーションⅠ（前期）、英語コミュニケーションⅡ（後期）、2 年次は、英語コミュニケーションⅢ（前期）、英語コミュニケーションⅣ（後期）で、20 名／クラスの構成で実施する。選択科目として、2 年次に医療英語（前期）、4 年次に英語ゼミナール（前期）がある。以下に説明する。

6.1.1 必須科目

英語コミュニケーションⅠ（1 年次前期）：臨床ケアと看護研究に必要な英語力の基礎固めをする。英語教育において効果が示されている通訳訓練法を応用し、英語の 4 技能（読む、聴く[3]、話す、書く）の基礎を強化する。頭から訳（順送りの訳）としては、スラッシュリーディング、サイトトランスレーション（読む）、シャドーイングや区切り聴き（聴く、話す）を実施する。また、論理的に整理された簡潔な英語を作る（書く、話す）ために、英語にしやすい日本語への変換のし方、要約の方法、ラベリングとナンバーリング、時系列・原因と結果・比較と対比の表現を学ぶ。日常生活での表現力を強化できる表現バリエーションとして、物の位置関係、自己紹介・敬意、要求を表す表現ができるようにする。

英語コミュニケーションⅡ（1 年次後期）：英語コミュニケーションⅠで学んだ英語の 4 技能を実生活で使えるようにする。外国人の患者や家族が病院に来て、実際の診療に至るまでの場面（総合案内での受診科の確認、受診登録、診療科や検査室への案内、次回の予約、会計、薬局での薬の受け渡し、簡単な事前問診）を想定して、関連場面の英語対話の演習と、その場面の通訳演習も含めていく。看護学士にとって最低限確保すべき EOP になる。2 年次の選択科目「医療英語」を受講する前の基礎とも位置付けている。並行して、『ナースのためのチキンスープ』などを使って読む力の強化も図る。

英語コミュニケーションⅢ（2 年次前期）：（Academic Writing から Presentation へ 1）EGAP と

[3] 英語 4 技能の listen to は「聞く」ではなく「聴く」であることから、本稿では「聴く」とする。

して、看護基礎教育で必要なアカデミック・ライティング（パラグラフとエッセイ）を学ぶとともに、書いた原稿をもとにプレゼンテーションができる力を養成する。テーマを決定するための作業、内容のリサーチと必要な情報収集、アウトラインの作成、Introduction・Body・Conclusion の展開、そしてサインポスト（スピーチマーカー）の効果的な使い方を知る。健康、保健、看護などに関連した題材をテーマにしてパラグラフを書き、次にエッセイの作成に進める（パラグラフとエッセイの作成段階では推敲を重ねていく）。完成したパラグラフやエッセイをスピーチテキストに改変して、プレゼンテーションを行う。パワーポイントも作成する。基本的な英語の発声、音声表現、マイクの使い方などを身につけ、効果的なプレゼンテーションを行えるようにする。

英語コミュニケーションⅣ（2 年次後期）：（Academic Writing から Presentation へ 2）英語コミュニケーションⅢでの学びを進め EGAP から ESAP へ移行させ、英語のライティングとプレゼンテーションを洗練させる。プレゼンテーションでは、TED Talks をいくつか分析し、人を惹きつける魅力ある内容と発表のし方を検討する。人に伝える価値があると思うテーマを一つだけ選び、それをサポートするアイディアをいくつも集めて提示順序を考えて、ライティングを完成させる。効果的な非言語情報の使い方を検討し、パワーポイントやポスターなど、有効だと思うツールを活用して、プレゼンテーションを行う。テーマは「大学でのこれまでの学びあるいは経験で、一番心に残ったこと」とする。

6.1.2　選択科目

医療通訳（2 年次前期）：英語コミュニケーションⅡで学んだ看護の EOP をさらに進めて、実際の臨床で使えるようにステップアップさせ、外国人患者に対して看護・診療場面における英語対話のコミュニケーションができることを目指す。医療通訳の基本スキル（逐次通訳、ノートテーキング）を習得して診療場面の簡単な通訳ができるようにする。医療通訳者の役割、活用方法、コーディネーションについても検討する。医療場面で生じる可能性のある異文化問題も検討する。日本の医療制度については、書物に掲載されている説明をよく理解して、英語にしやすい日本語に変換して簡単な英語で十分な内容が説明できるようにする。特に、国民皆保険、フリーアクセス、窓口払い、保険料、医療機関、診療科、受診の流れ（患者の視点で受付から会計までの流れ）などについては、分かりやすい英語で説明できるようにする。

英語ゼミナール（4 年次前期）：前半では 1970 年以降の国際看護で議論の焦点になっている社会学的な看護研究から、3 つの英語の論文あるいはレポートを読む。IOM の *The Future of Nursing* や国連 SDG 関連のレポート、Nursing Now! Campaign の資料などを教材にする予定である。そのあと、自分が考える「看護が導く明るい未来社会」をテーマにリサーチし、原稿を作成してプレゼンテーションを行う。アブストラクトは事前に作成して提出しておく。英語コミュニケーションⅠ～Ⅳで学んだ英語の書き方や発表のし方を最大限活用してプレゼンテーションを準備する。国際会議で使われる慣用表現を学び、使えるようにする。プレゼンテーションは、国際会議の形に則り、発表と質疑も英語で進める。

6.2　授業の展開

現在、1 年次前期が終了したところである。これまでの進捗について以下、説明する。まず、学生の一般情報からである。

6.2.1　学生のプロファイル

入学者は 110 名で、一部を除いて高等学校からストレートで進学した。全員が日本語母語話者である。77％以上が幼稚園から高等学校まで、ネイティブ教員（ALT 等）の指導を受けたことがある。また、77％が 1 週間以上の英語圏のホームステイ経験があり、1ヵ月以上のホームステイ経験者は 3 人いた。

6.2.2　ガイダンス

授業をスタートさせる前に、各クラスで学生らと、なぜ、看護系大学で英語を学ばなければならないのかをディスカッションし、その内容を以下のようにまとめて配布した。

大学の看護学科でなぜ、英語を学ぶのか？

■ 仕事の場面で必要
- 臨床ケア／診療場面のコミュニケーション（外国人患者）
- 海外のナースなど医療職者とのコミュニケーション（訪日ゲスト、海外渡航時）

■ 今後の看護研究に必要
- 英語の原資料（論文など）を読む
- 国際会議で発表する
  - ・英語のアブストラクトを書いて、学会発表に応募する
  - ・発表原稿（パワーポイントや発表テキスト）を作成する
  - ・英語で発表する（プレゼンテーション）
- 英語の論文を書き、学会誌など看護の専門ジャーナルへ投稿する

■ その他
- 海外留学をする
- 教養を高める

7.2.3　授業の実施

一クラスは 22 名とし、プレイスメント・テスト[4] で成績順に 1 から 5 のクラスに分け、筆者が授業を担当した。ESP は英語で授業をすることではない（Dudly-Evans 1998：9）のだが、大東看護の授業で英語を使っている。学生の英語の発音を聴くと、語尾の無声化は不十分なものの、ある程

[4] 特定非営利活動法人（NPO）ELPA 英語運用能力評価協会（http://npo-elpa.org/test/）によるプレイスメント・テストで、テスト内容のレベルは TOEIC 300～700 点である。

度はできており、全体として、英語に触れてきた経験（ネイティブ教師の授業を受けた経験など）があったため、授業での英語使用は可能であると判断した。学生の反応を見ながら、教師が英語で授業を行う時間を長くしていっている。前期の後半以降、教師の英語使用は、クラス 1 では 100%、クラス 2 は 80%、クラス 3 は 50%、クラス 4 は 30%、クラス 5 は 20%であった。教師の英語は明瞭な発音で意味の固まりごとにポーズを入れ、難しいところはパラフレーズしたりして理解を促した。日本語の訳出については、英語のみの説明では限界があるので、必要時、日本語で説明は加えている。学生は、簡単な英語表現を使える場合は英語を話すが、ほとんどの場合、日本語で返答している。

7. 学生アンケート

7.1 授業について

大学が全学部共通して実施している授業評価アンケートでは、授業満足度について 80%～95%の学生が「ほぼ満足」以上の回答をしている。自由回答では、英語での授業の進行と、通訳訓練法を用いた演習（シャドーイング、区切り聴き、頭からの訳）について、支持するコメントが複数寄せられた。英語音声に常にさらされることで、リスニング力の増強を実感できるという意見である。ただ、クラス 1 と 3 で、文法について説明を求める意見があり、英語を使用する授業の効果を感じるとともに、理解を確実にしたい内容では、必要最小限の日本語での説明を欲していると思われた。

7.2 現段階での大学の英語教育への期待

大学共通のアンケートとは別に前期終了の段階で学生にアンケートをとった。その中からいくつか示す。まず、学生が考える英語の 4 技能（読む、書く、聴く、話す）の各重要度を尋ねた。結果は、表 1 である。数字は回答者数である。

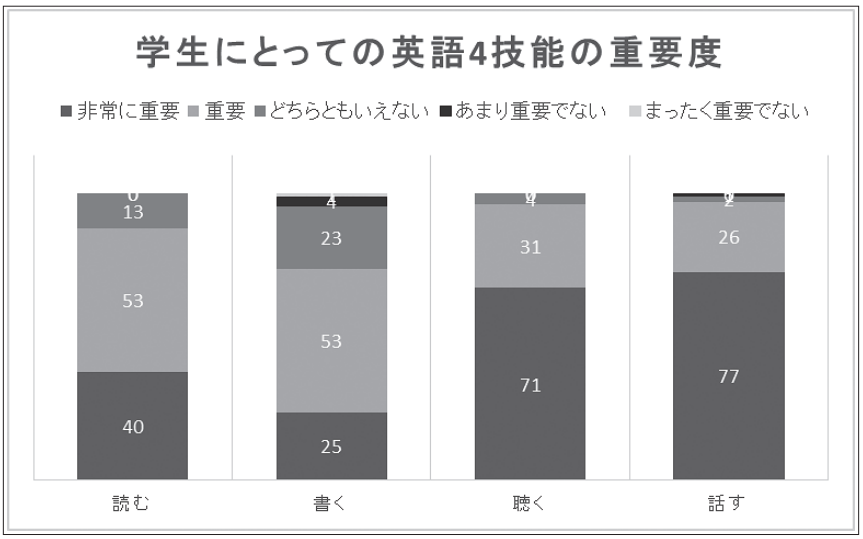


表 1　学生にとっての英語 4 技能の重要度（1 年次前期終了の段階）

授業のスタート前に「大学の看護学科で、なぜ英語を学ぶのか」についてガイダンスを実施したが（前出）、1 年次前期の終了時点の学生の反応は、先行文献（本岡：30-31、廣内：102-103）の指摘のように、やはり話す・聴くというオーラル・コミュニケーション力を重視していた。聴くよりも話せる能力を強く求めている。読む力について重要性はある程度、認識されているが、書くについては、他の技能に比して低く、4 人が「あまり重要でない」、1 人が「まったく重要でない」と答えていた。自分の考えを自分の英語で書けることが「話す」能力の獲得に最も有効であることを学生らはまだ認識できていないようである。

将来の英語の必要性を尋ねた結果は、表 2 のとおりである。

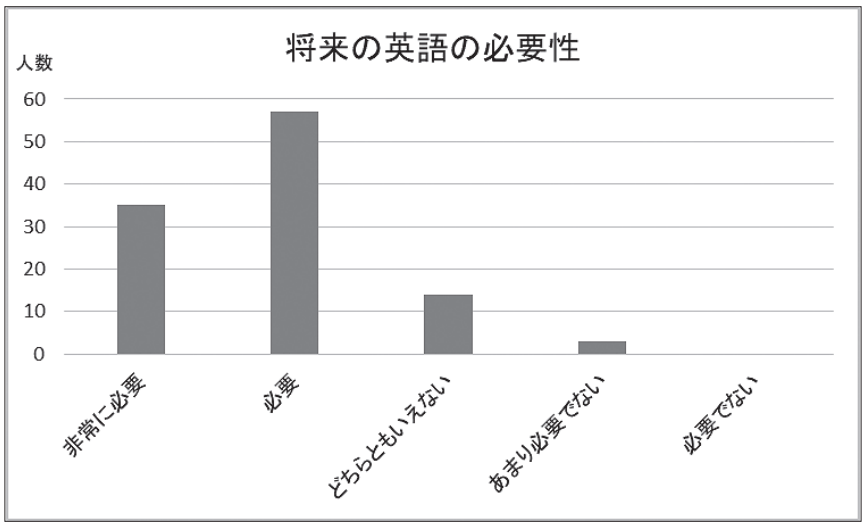


表 2　学生が考える将来の英語の必要性

英語の必要性については認識しているが、「非常に必要」よりも単に「必要」との回答が多い[5]。「あまり必要でない」との回答の理由に「日本で看護師をする場合に現場で英語を使う機会があるのか疑問である」とのコメントがあった。「必要」と回答した大多数に共通したコメントは、「卒業後は国内で看護師として働くことを目標にしているが、日本に訪日・在留外国人の患者の増加が見込めるために診療現場でケアするのに困らない程度の英語コミュニケーション力をつけたい。だから、（口頭での）コミュニケーション力をつけることができる英語の指導を期待したい」であった。

英語の必要性を強く感じている理由には、「海外で看護師をしたい」、「青年海外協力隊に参加したい」、「いろんなことに興味があり英語能力を身につけて看護師として将来の活動の幅を広げていきたい」、「グローバル化は医療現場も例外ではない。日本で看護師をやっていく上でも話せて当たり前になってくると思う」があった。看護学科の特徴的な回答としては、「機械（の操作）や（投）薬に必要だから」、「外国人の患者とのコミュニケーションで英語が理解できないと医療ミスにつなが

[5] 「必要」が「非常に必要」より多いのは、5 クラスに共通している。

るおそれがあるため」や「（患者の）不安を取り除く看護師は不可欠だから」英語が非常に必要だと、具体的な看護行為に関連づけた回答もあった。「海外旅行に必要だから」という回答はごく少数である。興味深かったのは 8 人が「英語の論文など資料を読むのに英語力は必要」と回答していることである。読む能力の重要性については、卒業近くになると学生らは必要性を感じると先行文献（本岡、廣岡）では指摘されているが、大東看護では、すでに 1 年次前期の段階で少数ながらも必要であると回答していた。英語授業のスタート時のガイダンスのためか、あるいは看護の専門分野の授業の影響かは不明であるが、前期の段階で看護学士課程の学修が着実に進んでいると思われる。

8. おわりに

本稿では、大学英語教育における ESP の概要を示した上で、看護学士教育における ESP の先行文献を確認し、そこでカバーされていない、看護の ESAP に関するジャンルを示唆した。後半では、新設の大東看護における、ESP に基づく英語教育プログラムについて説明し、その教育を受けた学生に対する前期終了時点でのアンケートから、いくつか回答を選んで報告し、検討を加えた。

4 において、看護の語彙の変遷からグローバル看護というディスコース・コミュニティのジャンルを考察したが、これはあくまで暫定的なもので、詳細な研究をさらに進める必要がある。そして、随時、それを発表するとともに教育実践に反映していきたい。また 5. で説明した看護学士課程の英語教材については、前期で sub-technical 教材として「マララ・ユフスザイの国連スピーチ」と「簡単な保健医療ニュース」を音声に、『ナースのためのチキンスープ』を読解と訳出法の訓練に使用した。教材の使用を評価して修正するというプロセスを進め、また報告したいと考えている。

以上の英語教育を通じて、大東看護の学生がグローバル看護のディスコース・コミュニティでの英語使用に適応していける能力をつけていくことを期待しているが、こうした能力の指標や評価については、これからの課題である。さらなる研究を加速させたい。

参考文献

Dudly-Evans, T.（1998）. “Overview of ESP in 1990,” In Orr.T（ed.）（1998）. *Proceedings 1997: The Japan Conference on English for Specific Purposes*（pp.8–14）. Fukushima: Center for Language Research, University of Aizu. https://files.eric.ed.gov/fulltext/ED424774.pdf（retrieved on August 9, 2018）.

Dudly-Evans, T., John, M.J.S.（1998）. *Developments in English for Specific Purposes*. Cambridge: Cambridge University Press. 301p.

一般社団法人 日本看護系大学協議会（2018）『一般社団法人日本看護系大学協議会 平成 30 年会員校（大学一覧）http://www.janpu.or.jp/campaign/file/ulist.pdf （2018 年 8 月 29 日）

金井一薫（2009）「ナイチンゲール文献研究における『A Bio-Bibliography of Florence Nightingale』の意義と、本書が日本のナイチンゲール思想研究に及ぼした影響について」『東京有明医療大学

雑誌』Vol.1. pp.13-30.

口元志帆子・竹内久美子（2009）「看護基礎教育における英語教育の実態調査―全国看護系大学・短期大学・専門学校の調査結果から―」『目白大学 健康科学研究』第 2 号：49-54. https://mejiro.repo.nii.ac.jp/?action=repository_uri&item_id=464&file_id=21&file_no=1 （2018 年 8 月 9 日）

竹蓋幸生・水光雅則（編）（2005）『これからの大学英語教育 CALL を生かした指導システムの構築』岩波書店．255p.

寺内一・山内ひさ子・野口ジュディー・笹島茂（編）（2010）『英語教育学体系第 4 巻 21 世紀の ESP 新しい ESP 理論の構築と実践』大修館書店．251p.

トメイ、アン・マリナー、アングリッド、マーサ・レイラ（著）、都留伸子（監訳）（2004）『看護理論家とその業績第 3 版』医学書院 . 672p.（Tomey, A.M., Alliqood, M.R.（ed.）（2002）. *Nursing Theorists and Their Work.* St. Louis: Mosby.）

廣内裕子（2012）.「目的別外国語教育の一考察―看護学科の ESP（目的別英語教育）の英語コミュニケーションの授業報告―」『園田学園女子大学論文集』 第 46 号：99-111. https://www.sonoda-u.ac.jp/tosyo/ronbunsyu/ 園田学園女子大学論文集 46/099-111.PDF （2018 年8月9日）

本岡直子・川崎裕美（1999）.「大学教育における ESP（English for Specific Purposes）― 看護教育課程における学生の英語学習に対する意識の変化について―」『広島県立保健福祉短期大学紀要第 4 号（1）：25-33. https://ci.nii.ac.jp/els/contents110004669427.pdf?id=ART0007400044 （2018 年 8 月 9 日）

（2018 年 9 月 27 日受理）